不具合を表す日本語
―外国人留学生に対する自動車整備専門日本語教育の視点から―

清水勝昭

1．は　じ　め　に

筆者の勤務校では50年以上にわたり外国人留学生を受け入れてきた。ターニングポイントとなったのは1998年でこの年の４月に直接海外からまとまった数の学生を専門の学科に受け入れを始めたことがきっかけとなり，自動車整備専門分野に係る日本語教育の取り組みが始まった。この四半世紀の大きな流れとしては，学生の出身国が，漢字使用圏から非漢字使用圏へと変化し，日本語学習を取り巻く関心事がカタカナ語彙から漢字語彙へ移行したことが第一に挙げられる。自動車整備分野においては，力学，工学の専門的概念を理解するために必要な核心的語彙に漢字二字の字音語や字音接辞が使われることが多いため，ベトナム，スリランカ，ネパール，バングラデシュなど非漢字使用圏出身の学生の文章読解力の問題が指摘されるようになった。この変移は，二級自動車整備士の国家資格の受験学習に不可欠な日本語文章読解力が，見て意味のわかる語彙の多寡によって左右されることを示唆することとなった。

このことから筆者は専門教育教材に出現する日本語語彙の表記（文字）と語種（漢語, 外来語, 和語，及び混種語）に着目して，学習者の困難点となりうる要素を検討してきた。これを引き継ぐ形で，本稿においては表記と語種を横断的に俯瞰するため，不具合を表す語という特定の範囲を設定し，専門教材の日本語文に出現する語彙の分析，並びに日本語教育の視点から見た問題点の指摘を行うこととした。

2．不具合を表す語とは

本稿で取り上げる「不具合を表す語」とは，部品や部材などモノの状態が通常と異なり良くないことを表す語のことである。自動車整備とは点検を通じ装置や部品が規定された基準に合っているか否かを調べ，それに適合するよう調整，修理，交換を行うことである。また，たとえ基準に合っていても，予防安全の観点からユーザーとの対話を通じて刷新に至る場合も少なくない。自動車の不具合に係る語彙の確実な習得は，将来，日本国内で自動車整備職に従事することを想定をしている外国人留学生にとって重要な学習プロセスであり，また，そのことが日本のクルマ社会の安全性を維持することにもなる。試みに自動車整備士の教科書[1]（以下「テキスト」とする）

1　一般社団法人自動車整備振興会連合会編『三級自動車整備士（総合）』（2023年10月発行）を使用した。

の「Ⅴ．ホイール及びタイヤ」の「３．整備」の若干の頁（p.250-p.253，合計４頁）を一瞥しただけでも，「摩耗」，「変形」，「損傷」，「異物」，「亀裂」，「折損」，「固着」，「剥離」などの漢語，「アンバランス」，「セパレーション」，「クラック」などの外来語[2]，「錆付き」，「曲がり」，「はがれ」，「切れ」，「割れ」などの和語，「コード切れ」という混種語（外来語＋和語）が見られ，さまざまな語種に渡っている。また，表現レベルでは，「～力が過大（となる）」，「～力が低下（する）」などの特徴的な形が見られる。

３．収 集 と 分 類

本稿では，前述の「テキスト」の「第９章　点検･整備」の「Ⅰ．エンジン」と「Ⅱ．シャシ」（p.341～p.365，合計25頁）から「不具合を表す語」を可能な限り収集した。これを語種別に分類を施し，下に示す。収集した各語の表記（漢字，カタカナ，ひらがな）はテキストに準じている。

（１）漢語

Ａ：～スルの形になりうるもの

劣化
膨張
損傷
摩耗
破損
腐食
断線
消耗
振動
破断
乾燥
混入
衰損
折損
欠損
剥離
短絡

2　テキストでは「剥離（セパレーション）」，「割れ（クラック）」のように外来語が漢語や和語の同義語として（　）内に併記されている。

B：「～スル」の形にならないもの

亀裂

異音

（2）外来語

A：「～スル」の形になりうるもの

スリップ

ノッキング

パンク

バースト

B：「～スル」の形にならないもの

オーバトルク

（3）和語

A：動詞

汚れる

偏る

傷める

傾く

割れる

湿る

濁る

B：連用形名詞

汚れ

漏れ

水漏れ

緩み

詰まり

引っ掛かり

滑り

錆

曲がり

ひねり　※「曲がり」の後ろに（　）で付記されている

はがれ

出っ張り
伸び
つぶれ
やせ
かじり
引きずり
ズレ

C：名詞（連用形名詞以外のもの）

傷
がた
錆汁

D：擬態語

ふわふわ

（4）混種語

A：外来語＋和語

オイル漏れ
フルード漏れ
ギヤ鳴り

B：漢語＋和語

不ぞろい
液漏れ

4．結 果 と 分 析

異なり語として最も多いのは漢字二字の漢語（字音語）と連用形名詞である。この点は不具合を表す語の特徴であると言える。一方で，一般に機械の不具合を表す語として多いと推測される擬態語・擬声語については擬態語の一例のみである。

漢語については，定義づけを必要とするような専門用語とは言えないものの，日本語学習の観点からすると高いレベルの語が多数を占める。また，意味が近似する語が複数見られ，たとえ日本語母語者であっても専門知識なしには意味の判別が難しい。非日本語母語学習者であれば正確な意味の違いまで理解するには専門的な学習を要すると思われる。

外来語については，自動車部品名称の圧倒的多数が外来語であることと対照的に，不具合を表す語においては極めて少数で，限定的である。すべてが専門用語に属する語で，当該頁中の「パンク」,「バースト」は脚注があり意味の説明が付記されている。

和語については，連用形名詞が多数を占める。連用形名詞には日本語母語者にとっては日常的

で簡易に見えるものが多いが，日本語学習者にとっては必ずしも既習であるとは限らない。そのため，学習者が本当に意味が分かっているのかどうか丁寧なチェックが必要である。一般に，擬態語・擬声語は機械の不具合を感覚的に表現するのに多く使われるが，日本語学習者には意味の把握が難しく，同時にその説明も難しいとされる。しかし，テキストでの出現は一例のみであった。また，和語の一部には「やせ」,「かじり」など専門用語に相当する語も見られる。

和語の表記上の問題に係る語として，カタカナで表記された「ズレ」と，ひらがな表記された「がた」がある。一般に，本来はひらがな表記することばをカタカナで表記し際立たせ，ひとまとまりのことばであることをはっきり示すこと，または，そのような効果をねらってカタカナで表記されることが多いためにそれが慣用化，一般化しているものがある。「ズレ」はその類であると思われる。他方,「がた」はそのままひらがなで表記されているが,「軸受部にがたがないか」や「ペダルを踏んでがたが止まる」という表現の中にあっては，前後にひらがなの助詞が連続しており，非母語学習者にとっては「がた」が一つの語であることに気付きにくい。

混種語についてはいずれもが後置成分が連用形名詞であるため，まず連用形名詞の成分の意味の把握が必要である。

漢語 A が「～スル」の形式となった場合, 並びに, 和語 A, 和語 D などいわゆる動詞性の語は,「～テイル」の形,「～タ＋名詞」の形を取る。ちなみに D の「ふわふわ」は「～した感じ」の形で出現している。

漢語 A が「～スル」の形になっていない場合，並びに，漢語 B，和語 B，和語 C，混種語（連用形名詞が後置成分である）などいわゆる名詞性の語は,「…の～」（例：エアの混入),「～の有無」,「～がある／ない」,「～のおそれがある／ない」,「～が著しい」,「～防止」,「～の点検」,「～について（点検する)」などの文脈で出現する。

外来語 A が「～スル」の形式になっているものは「(ベルトが) スリップし, …」の一例のみで, 他の「ノッキング」,「パンク」,「バースト」はいずれも「～スル」の形ではない。

5．補　　足

不具合に関連することばについて三点を補足する。以下に述べる語例や表現例は前述のテキストの語彙収集範囲内から抽出したものである。

第一に，表現レベルでは比較的特徴的なものが繰り返し使用されていることである。以下にその具体例を示す。〈A〉群は主として状態，量，数値，程度などに係る語または表現である。また，〈B〉群はそれがどうであるかを述べる表現である。テキストでは A が B の「～」の箇所に入る形，すなわち「何々（A）がどのよう（B）である」という形で出現する。例えば,「遊びの量が規定の範囲にあるか」や「シューの作動状態に異常がないか」という表現を取ることによって,「遊びの量が規定の範囲にない」,「シューの作動状態に異常がある」といった不具合を示唆している。

〈A〉群

「…具合」（例：張り具合，焼け具合，消耗具合，レバーの引き具合，ブレーキの効き具合）

「…量」（例：たわみ量，電解液の量，遊びの量，オイル量，たるみ量，出っ張り量，ブレーキ液量）

「…状態」（例：取り付け状態，差し込み状態，作動状態）

「…代」（例：引き代，踏み代）　※「代」を「～しろ」と読む点にも注意を要する

「…値」（例：測定値）

「…力」（例：操舵力，制動力）

そのほか，「クリアランス」，「ギャップ」，「たるみ」，「隙間」，「圧力」，「厚さ」，「高さ」，「（溝の）深さ」，「（エア）圧」など

〈B〉群

「～が規定値である／ない」

「～が規定値以外である」

「～が規定値にある／ない」

「規定値を外れる」

「～の規定値が閾値[3]以下／閾値を超える」

「～が規定の範囲（内）にある／である」

「規定の～が得られない」

「規定の～が発生する」

「～が適切／不適切」

「～の良否」

「～の有無」

「～が…過ぎる」

「～の過大」

「～が異常に…」

「～に異常がある／ない」

「～に不具合がある／ない」

「～が十分である／ない」

「～が不足している」

第二に，自動車の運転に関する特有の表現として，「ハンドルが振られる」，「ハンドルが取られる」という言い方が見られる。この類の語彙は日本語母語者，とりわけ自動車の運転をしている者にとっては自明，簡明なことばであるが，高等教育機関に在学している外国人留学生には未

3「閾値」には「しきいち」のルビが振られている。

知の可能性が高い。また，説明を施しても意味の把握がしにくい。

第三に，不具合の反義表現として，「スムーズに／なめらかに／円滑に…スル」，「スムーズな／なめらかな／円滑な…」の表現が特徴的に使用されている。例えば，「接続がスムーズであるか」，「接続がなめらかであるか」，「円滑な発進ができる」のような表現がある。「スムーズ」，「なめらか」，「円滑」はそれぞれ別の語種であるがほぼ同じ意味で，同じ表現の中で使用されている。

6．お わ り に

日本語の授業では日本語母語者にとって自明，簡明だと思われることばが非日本語母語者にとっては必ずしもそうでないことに気付かされることが少なくない。専門教育の現場ではこの点に特に注意が必要である。「ブレーキが甘い」はその一例で，筆者は，それが「良い意味か悪い意味か」を毎年，一年次の学生に尋ねているが，自信を持って正答を出す者が半数を超えることはない。ときによっては半数以上がそれを「良い意味だ」と答えることもある。このことは本稿作成の動機の一つでもある。ところが「テキスト」には「甘い」は出現していなかった。他方，将来彼らが社会に出て同僚や顧客とのコミュニケーションが始まれば，日常的なレベルで遭遇する可能性がある。多種多様な擬態語・擬声語もしかりである。テキストや国家資格試験に出現しないが社会で遭遇する可能性の高い語彙，かつ，日本語母語者にとって自明，簡明な語群の習得をどう解決するかという問題が残っているのである。自動車整備分野の専門日本語教育の課題である。

参 考 資 料

一般社団法人自動車整備振興会連合会編，三級自動車整備士（総合），2023